大阪成蹊大准教授　福岡亮治

国境なき理科実験、ぜひパラオで

㉜ 夢

数年前の話ですが、大学教員として初めて指導した学生が学会発表を行い、最優秀賞を受賞しました。テーマは「ユニバーサルデザイン」。その後も、同じテーマで、その後輩が学会賞を受賞しています。

ユニバーサルデザインとは、身体能力の違い、言語、年齢や性別などにかかわらずできるだけ多くの人が利用しやすいようにつくられたデザインのこと。そして、全ての人が楽しめるからこそエデュテイメントは成立すると考え、私自身もユニバーサルデザインを意識した理科教育の実践を行っています。

たくさんのアプローチがある中で特に意識しているのが「言語」です。タイでは、一夜漬けでタイ語を丸暗記し、授業を行い、手応えあり！「実験がわかりやすく楽しければ片言でも伝わる」ことが分かったので、アメリカではさらに言葉での情報を減らすためにあえて英語を使用せず、日本語で授業を行うことに挑戦し、子どもたちと楽しい授業をすることができました。

昨年度は、その経験を生かし、テロップ無し、ナレーション無しの映像で、言語問わず誰もが楽しめる理科実験の表現を行う科学番組の監修を担当しました。さらに、同じ発想で、絵で表現することで、英語が分からなくても理解できる英語科学絵本作りも始めました。

これらの集大成として、私には次の夢があります。

「パラオ共和国の子どもたちと理科実験をしたい」

パラオ共和国（以下パラオ）は、日本との関係が深く、言語や文化などにさまざまな日本の影響が感じられます。全ての州ではありませんが、パラオ南西部のアンガウル州では公用語の一つに日本語があります。また、パラオ語自体も約1000語の日本語由来の言葉が存在しています。

在パラオ日本国大使館がアップしているユーチューブ動画から一部例を示します。

「テンジョ＝天井」「デンキ＝電気」「マド＝窓」「シャシン＝写真」などの名詞だけでなく、「タンシイ＝楽しい」「ゴメン＝ごめん」「ダイジョーブ＝大丈夫」「オソロイ＝おそろい」などがほぼ同じ表現になっています。また、ビールを飲んだり休憩したりすることは「ツカレナオス」と表現するそうで、日本との深いつながり、絆を感じずにはいられません。

そのパラオで言語問わず誰もが楽しく理解できる実験をし、その補助教材（テキスト）として、英語科学絵本を使用し、日本語由来のパラオ語のみを使用した授業をしたいと考えています。

まだパラオにコネクションはありませんが、パラオの子どもたちが明るい笑顔になる姿を想像して授業をつくり、現地の学校で実践できるように交渉していきたいと考えています。そして、これらの経験を生かして、いつかは、世界中の子どもたちを楽しませたいです！

京都新聞社
The Kyoto Shimbun Co.,Ltd.
© 京都新聞社　無断複製・転載を禁じます